

佐藤善也著『北村透谷 解説と論究』

出口 智之

あくまで文業の概況についての話だが、北村透谷は近代の文学者のなかでもいささか特異な存在のように思われる。

わずか二十五年の生涯に、日記や書翰、翻訳まで含めても三巻の全集に収まる程度の作品しか残さず、しかもその大半は短篇の評論である。にもかかわらず、小説が中心的な位置を占める近代散文学研究において大きな存在感を有し、現在でも北村透谷研究会をはじめとして活発な研究が続けられている。作品の少なさという点ではたとえば樋口一葉や梶井基次郎、評論が主体という点では小林秀雄なども想起できようが、一葉・梶井は小説で評価が高く、小林には多くの長篇評論があることを考えれば、透谷の異質さは際立っている。一方、詩人としての活動も知られるが、代表作である「楚囚之詩」「蓬萊曲」は、近代ではほぼ命脈を絶った長詩・劇詩であり、この点でもやはり異彩を放っていると言えよ

う。

こうした透谷の文学が今なお多くの興味を集めているのは、ひとえにその作品の魅力と問題性のゆえにほかならないが、本書は昭和中期から一貫して透谷研究の中核を担ってきた佐藤善也氏が、彼の文学の核心に迫ろうとした四冊目の単著である（なお、透谷研究とは別に『芥川龍之介のクリスト像』がある）。全体の内容は、題名に「解説と論究」とあり、また「あとがき」に「私が今まで透谷及び透谷に関連する事柄について書いてきたものの中から、既刊の著書に収録されていないものを集め」と記されているように、透谷の名句の解説や「一夕観」の現代語訳、「我牢獄」「悪夢」「蓬萊曲」「富士山遊びの記憶」および評論に関する論考、伝記的事実の考察、諸氏の透谷論の書評や解題、そして氏自身が手がけた『日本近代文学大系』9 北村透谷・徳富蘆花集（角川書店）の補注において、引用を省略されていた英語原文の一覧など、きわめて多岐にわたる。すなわち、本書は氏の先行三著、『北村透谷―その創造的営為』『透谷 操山とマシュー・アーノルド』『北村透谷と人生相渉論争』を補

う性格を持つものであり、文学研究書をめぐる出版環境が厳しさを増しつつある当今、このような形で刊行が成ったことを、まずは賀すべきであろう。かなりの文章が一度は活字化されているとはいえ、通覧が可能となった影響の大きさは論を俟たないし、「蓬萊曲」「人生に相渉るとは何の謂ぞ」「内部生命論」の理解を扶けるバイロン・シェークスピア・カーライル・エマーソンの英語原文が、前述の補注と対応する形で翻印されたことも、今後の透谷研究に大きく資する成果である。

とはいえ、その英語原文を透谷のテキストと照らすことによる具体的な成果については、今後の詳細な研究に譲るべきであろうし、また書評をさらに論評するというのもいささか奇妙なので、ここでは論考に絞ってその内容を簡単に紹介しつつ、卓見を申し述べてみたい。

本書の論考のなかで最も大きな分量を持つのは、第Ⅱ部第一章「我牢獄」解説の「諸方法」である。氏は本作を「解説」するに際し、まず「極めて素朴な一読者」、すなわち「透谷及び透谷の著作について全く

何の知識も持たない読者」を仮定し、そうした読者が「我牢獄」を読んだ時の思考の変遷を推定する。続いて、四十三本におよぶ「我牢獄」の先行研究を取上げ、主要な問題点に関するそれぞれの見解を整理する。そのうえで、洗い出された様々な解釈と右記「極めて素朴な一読者」による解釈とを対比しつつ、考察を進めてゆくのである。

氏の整理によれば、「我牢獄」を読むうえでの問題点は「第一期・自由の世・故郷の意味、原体験との関係」「第二期・牢囚の世の始まり」「厭世詩家と女性」との対応関係または引用箇所「「牢囚」「牢獄」の喩の意味もしくは右に関連する言及」「恋愛」の意味、モデル」の五点に大別される。このうち第一点の「第一期」とは、作中の我が「獄室」に囚われる以前のことであり、先行研究の見解は「経験的・時間的」に存在したものとする見解」「第二期においてはじめて存在し得る」〈幻想〉としての存在とする見解」およびその他にわかれる。第二点に関しては、「透谷の民権運動離脱の原体験に関係させるもの」「ミナとの結婚に関係させるもの」「特に

それらと関係づけられないもの」に分類される。第三点に関しては、「想世界」と「実世界」との衝突の問題と対応させるもの」「恋愛」と「婚姻」との関係の問題と対応させるもの」「恋愛」または「婚姻」の問題の一方に言及するもの」に分類される。第四点に関しては、主人公の陥つた状況を外部（明治の資本制社会等）、あるいは内部（精神）に求めるといふ方向に見解がわかれる。第五点に関しては、「モデルを想定するもの」「想定しないもの」「男女の恋愛としないもの」にわかれる。

こうした整理のうえで、氏はそれぞれの得失を簡潔に評してゆく。ここにそのすべてを列挙する余裕はないが、場合によってはたがいに対立しあう見解について、それぞれの妥当性を認めることで「透谷解釈の幅」を視野に収めようとする氏の寛闊な姿勢は、透谷のテクストが持つ含意の豊かさを示し出すことにつながっていると言えよう。一方、氏自身の立脚点として繰返し強調されるのは、「小説内の語り手たる主人公と透谷自身とを、同一視する誤り」への警鐘である。たとえば、本作の語り手が経験した「恋愛」について、「厭世詩家と女

性」に見える「婚姻によりて実世界に擒せられたる」といった言説をそのまま援用し、本作で言われている「牢獄」を婚姻に比定するのは適当でない」と批判している箇所などがわかりやすい。

氏は、右記のそれぞれの点について、透谷と語り手との同一視を厳に戒めつつ、あくまでも語り手の言葉に即した解釈を展開する。そして最終的に、本作で言われる「故郷」について、主人公が現世に生れる以前に恋愛などのあらゆる自由を持っていた、しかも現世と同時に存在している別空間であり、恋人は今もそこに住み、主人公はそこから彼女を引寄せようと苦しんでいるのだからという解釈を提出している。また、主人公が幸田露伴「風流悟」を読んで、恋の牢獄が「楽園」と表現されていた衝撃から自身の苦悩を見つめなおし、本作の語り手にながったという見解、さらにはハムレットの独白により喚起された死後の世界への不安が、主人公の希望を圧殺したとする解釈も続いて示されているが、いずれも語り手の発言と文脈に寄添おうとする姿勢を共有している。すなわち、氏は「我牢獄」というテクストが持つ豊饒な含意のなかで、語

り手の思考と認識を緻密かつ徹底的に解析していくという、まさに一つの「方法」を提示しているのである。

こうした方法に対しては、文学テクストを時代状況や社会から切離し、特権化しているとの批判が当然予想されようが、逆に言えばそれがテクストを時代に回収し、その文脈でしか読めないものにしてしまうという限界を抱えている以上、語り手の言葉が「普遍化」されていることを軽視せず、その言説と真摯に向きあつたうえで「解釈の幅」を認めてゆく氏の姿勢に、まずは共感と支持を表したい。だが同時に、本作の読解に透谷自身や別の作品を参照する試みが少なからず行われ、そして近年においてもなお絶えていないことは、単なる「両者同一視の誤り」として簡単に片づけてよいものでもないように思われる。たしかに、本作は「小説」と銘打たれて発表され、実際に一人称小説の形式を取つてはいるが、一方で露伴「風流悟」もそうであったように、きわめて抽象的かつ思索的な述懐に終始する、特異な作品であることもまた事実である。こうしたテクストについて、「小説」という仮に与えられたジャンルの性格

をそのまま前提化し、森鷗外「舞姫」や嵯峨の屋おむろ「初恋」のような同時期の一人称小説とまったく同等に扱うだけではないのか、むしろ小説であることを超え、透谷自身の言葉と捉えた読解・解釈を誘引してしまうような本作の性質まで視野に入れて論じること、近代小説という枠にとらわれず、ジャンル挑戦的ですからある透谷のテクストの可能性をより明らかにできるのではないか、そのようにも思われた。

本書には続いて、源実朝と公卿の物語を扱った未完の史劇、「悪夢」に関する三章が置かれている。そのなかで最も目を引くのは、先行する福地桜痴「東鑑拝賀卷」（明治二十六年）からの影響を探った第三章である。氏は「悪夢」中、「史実や伝承に拠った場合は殆ど「拝賀卷」の解説部分に従っている」と指摘し、両作を細かに対比することで、本作の公卿像が成立するまでの過程を跡づけている。そのうえで、タイトルにもなっている公卿の見た夢と、続く場面の詳細な検討から、彼の「暗い自己認識」「陰惨な自己凝視に進んでゆく必然性」を見出し、さらにひたすら源氏の復権を願

う「一本気な行動的青年」でありながら、同時に「理性的認識と暴力的情念とを心に相剋葛藤させ」た「シニカルで内向的な思索的青年」でもある彼の人物像をあらわにしてゆく論の運びは、きわめてスリリングで刺激に富んでいる。その公卿像を引継いだと目される、林和「公卿」（大正四年）を論じた続く第四章とともに、氏の透徹した読みが遺憾なく発揮された好論と感じられた。

「蓬萊曲」を扱った二章についても、特に第六章は作品を丹念に読解し、その主題を明確化した重要な論考である。氏は、自己と他者との関係や恋愛に苦悩する主人公素雄が、「醜悪な人の世の姿」に煩悶して救済を求めるものの、魔王から「現実そのものの破壊」という極端な道を提示され、神なき絶望に墜ちてゆくところに、「現世の否定と来世の肯定」というテーマを見出した。と同時に、その肯定すべき来世を描くはずの後篇「慈航湖」が未完に終わった結果、「現世を否定せざるを得なくなつた魂の苦悶の強さ、深さ、激しさ、その原因、遍歴等の表白そのものが、事実としての主題となつている」ことも指摘する。テクス

トの丁寧な分析と解釈により、その絶望の深さを明瞭に示し出した本章は、初出が昭和四十三年といささか古いものの、現在なお「蓬萊曲」を考えるうえで看過できない重要な位置を保っていると言えよう。

ここまで概観してきた氏の読解に共通して見られるのは、すでに述べたように、作中に透谷自身の文脈を持たむことを慎み、あくまで語り手の言葉に即して丹念にテクストを解析しようとする姿勢である。「蓬萊曲」論には「できる限り作品の内部構造に即して」との表現もあるが、独立した物語世界を有する作品を論じるにあたり、こうした厳格な態度を選択したことで、氏の論理には揺るぎのないたしさが備わっている。その一方、旅行記である「富士山遊びの記憶」論においては、氏自身の研究により確定された執筆時期である明治十八年夏に、透谷が置かれていた身辺の状況を踏まえ、作品にあらわれている彼の意識を讀取ろうとしている。こうした弁別は小説や戯曲、劇詩が虚構性を強く有するのに対し、「富士山遊びの記憶」が実際の旅行について書かれた手記であるというジャンルの違

いを考えれば、ひとまずはうなずけるものである。

しかしながら、「我牢獄」論について述べたことの繰返しとなるが、こうした厳密な区別はそれ自体、虚構世界の物語であることを知りながらなお透谷自身の言葉としての解釈を誘う、彼の作品の特質を取りこぼしてしまう虞れがあるのではないか。たとい旅行記であっても、言語という記号によって書かれている以上はある程度の虚構化は免れないはずであるし、逆にいかなるジャンルもひとしく作者自身の言葉と捉えることで、その人の思想に迫ろうとする読みかたも、決して有効性を失ったわけではないだろう。さらには、近代小説という形式そのものが、いまだはつきりと定めていたわけではない明治二十年代中盤の文学状況も、そうした性質のむこうに見据えることができるはずである。そのような研究によつてこそ、冒頭に述べたような透谷の文学の特徴と位置づけに迫りうるのではないかと愚考するが、しかしそれはさらなる透谷研究の進捗に期待すべきことかもしれない。

本書に収められた最も古い論考は、昭和

二十九年に発表された「当世文学の潮模様」論であり、すでに歴史的な位置を獲得している論考も見受けられるが、いまそうした本書をあらためて読返し、そこに築き固められた礎と向きあうことで、次なる研究の一步を踏出すことが求められていると強く感じた次第である。

(二〇一六年一月 三弥井書店 三六九ページ)

（でぐちともゆき 東海大学准教授）